

国指定史跡 先島諸島火番盛

平久保遠見台・川平火番盛

国指定史跡 先島諸島火番盛の概要

火番盛というのは、いわゆる遠見台の別称です。『球陽』という琉球の古文書には、1644年、船（主に異国船）が見えた時に素早く中山（王府）に情報を伝達する手段として遠見台を作ったことが記されています。この時期に遠見台が作られた理由については、江戸幕府の鎖国政策が深くかかわっているといわれます。

鎖国体制下において、同施設は、薩摩藩支配下の琉球王府によって設置され、海上交通の監視・通報（烽火）機能を担いました。「火番盛」とは火を焚く丘という意味を持ちます。宮古、八重山を含む先島諸島は、地理的条件から、スペインや中国（清国）の寄港を想定して設置されたそうです。琉球列島の最西端に位置し、東シナ海の緊張に直面する地域であり、要所であるという認識だったのでしょう。

なお、八重山では遠見台のことを火番盛と呼び、石垣島に限らず、他の島々でもそう呼ばれる傾向があります。

先島諸島の火番盛は、「対外関係と鎖国体制の完成を示す遺跡として重要である」として、2007（平成19）年3月23日に国指定史跡となりました。なお、先島諸島全域の13の島（2市2町1村）の18カ所が指定対象となり、うち、「平久保遠見台」と「川平火番盛」の2カ所が、石垣市にあります。

平久保遠見台（ひらくぼ・とおみだい）

平久保半島の北端、灯台駐車場東側の丘状になっています。17世紀初めには、『八重山島年来記』などに、「ひらくぼ番」と記されたのが、この場所だと考えられています。ここで挙げた烽火は、川平火番盛で確認され蔵元へ伝えられたと考えられています。しかし、平久保から川平への烽火を利用した伝達は、目視できない可能性もあり、その中間地点にも伝達を促す施設（中継地点的要素を持った火番盛？）の存在を考える研究者もいます。

川平火番盛（かびら・ひばんむい）

国指定史跡川平貝塚に近接して、川平火番盛はあります。ここでは、平久保遠見台から上がった煙を見て、確認したのを伝えるために応火した後、どんな船なのか詳細を目視してから、蔵元（今の石垣市立八重山博物館付近）へ情報を伝達するために馬を走らせたと言われます。石垣島の西海岸から蔵元への重要な伝達ポイントでした。



川平火番盛を見学なさる皆さまへ

川平火番盛は、こんもりとした丘になっておりますが、遺構も残されています。本来の目的のために利用する人々がなくなって久しく、現在は草木に覆われています。

また、遺構の一部は崩れてしまっている部分もあります。そのため、石積み遺構を頼りに丘に登ったりすることは困難な状況です。遺構保存のため、ご了承の上、見学してください。



平久保遠見台を見学なさる皆さまへ

平久保遠見台は、平久保灯台前駐車場の東側にあります。

灯台へ向かうように進んでいくと、駐車場の左手にところどころ岩肌が見える丘があります。

小道のようなものができていますが、危険なので見学は勧めていません。しかし、ここから見える石垣島北海岸と北西海岸の景色は、平久保灯台展望所でも確認することができます。石垣島の北側と北西側を守った、重要な場所なのです。

●豆知識●

平久保遠見台と川平火番盛の位置関係



川平火番盛から平久保方面を臨む



川平火番盛

平久保遠見台

4

